

Jñānaśrīmitra ḥ Apoha 論

小川 英世

『語・証相によつて否定 (apoha) が顕示される』という定立が、如何なる存在事象 (dharma) も言表され得ないということを確認するために論証される。[JNA 201]

この詩頌に始まる J (jñānaśrīmitra) ḥ Apohaprakaraṇa は、次の詩頌の敷衍によつて構成されている。

「語によつて、先ず第一次的に対象 (artha) が告知され、その際、否定がその guṇa として理解される。そして、一方の対象は、『実体化作用』 (adhyaśa, adhyavasāya) に基づき、他方の顕現する [対象は、知識内顕現 (pratibhāsa) に基づき]、言語対象 (vācya) と設定される。[こゝかこ]、真実には、如何なるものも言語対象ではあり得ない。」[JNA 203, 1-4]

ここに明示された見解は、次のようなものである。(1) 概念知の領域に所属する言語・推理等の認識は、肯定 (vidhi) を告知するものとして経験されるということ。対象とは、外界と表象 (ātmā) のことであり、それらは肯定「存在」を本質とする。(2) 否定が、肯定に対する或る関係によつて概念知の対象となるということ。guṇa という語は、概念知における否定の理解という点に強調が置かれる場合、副次要素 (upasāraṇa) ・限定者 (viśeṣaṇa) の意味にとられてゐる。(3) 外界は『実体化作用』だけ、表象は、知識内顕現だけに基

づいて概念知の対象となるということ。外界に知識内顕現を、表象に『実体化作用』を適用することはできない。このことは、概念知が外界「個物・実在としての普遍等」を対象とし得ないということ、及び信念 (abhināna) の世界では、概念知の対象は外界に成立する、ということに関連する。(4) 究極的には、如何なるものも言表され得ないということ。これが、J のアポーハ論の徴表である。

ところで、概念知においては肯定と並んで否定も理解される、ということの表明である(2)の見解は、R (śamakti) によつて「他者の否定に限定された肯定が語の対象である」と定式化されたものである。Mookerjee 氏、梶山氏などによつて「アポーハ論の歴史的発展三段階説」が唱導されて以来、この概念知における〈両者理解〉の思想は、三段階の最後に位置する全く革新的な説とみなされてきた。今やこの考えは、次の二点から修正を迫られている。即ち、この〈両者理解〉の思想は、既に Dh (śamakti) に明示されており、J もそのことを Dh に跡付けづゐるのである。

Dh は、PVI, k. 124-127 及びそれに対する自註における Dig-nāga の「命題」―他者の否定によつて―その実在の或る部分が理解される「[P]・R の定立と表現上の類似点をもつ「語はまさに他者の否定によつて限定されたものを表示する」[PSV, k. 36d] [P]―を捉えた解釈において、この〈両者理解〉を明示している。即ち彼は、P₁ に関して、これは「肯定」(anvaya) を伴わぬ「否定」(vaticāra) の不可能性を指すものであり、P₂ に関して、これは「語が実在としての否定を限定者とする」とは別個の実在を表示するということではなく、分析的には、(異他性) (bheda) 、経験的に、表象の指示・理解ということが否定の理解と不可離であるという

ことを指すものであると解釈し、「一方のものに所屬する（異他性）」の表示においても他者の否定が理解されるから、語は『肯定』と『否定』の指示によつて行為の因となるということを示そうと、 $P_1 \cdot P_2$ のやうに言われた。』[PVSV, 63, 9-11]と語ることによつて、この（両者理解）の思想を明確に表明してゐるのである。

Jは、このようにDhに既に明示されている（両者理解）の思想を、両者理解は直接的であるとか同時的であるというように詳細な規定を与えることによつて発展させるのであるが、アポーハ論の後継者という彼の歴史的立場は、『語・証相によつて否定が顕示される』というアポーハ論の一般的定立の有意味化の範囲でこの（両者理解）を問題にするという態度を彼に与えている。これは、Kunda- \bar{D} のアポーハ論批判にその典型が見出せるように、實在論学派等には、アポーハ論の一般的定立と我々の日常的意識に受容されている（肯定告知）とが矛盾するよう見え、そのことがアポーハ論の隘路と映じてきたためである。彼は、アポーハ論の一般的定立を解釈する際に、否定の単独理解という意味にとれば、通常経験との矛盾が帰結し、他方、経験は肯定の単独理解であるという前提を立てば、定立を有意味化することはできない、というようにディレンマを提示する [JNA 201, 9-202, 22]。このディレンマを打開し、アポーハ論の一般的定立を有意味化するためには、「両者理解」という前提に立たなければならぬのである。彼は、「肯定は仮令第一次的に理解されるものであつても除外されて、対象「肯定」と結びついているところの、しかも現に理解されているところの否定が表示対象 (abhidheya) に他ならない、と先述の「如何なる存在事象も言表され得ない」とうことを確立する」目的で言われる。』[JNA

203, 13-13] というようにアポーハ論の一般的定立を解釈する。（両者理解）こそがアポーハ論の一般的定立の前提にあるものである、というのがJの基本的な考えである。従つて、彼には、Dhの体系にこの（両者理解）を一貫してみようとする態度がある。Dhのアポーハ論における対立的な記述は、肯定と否定のいずれか一方の主要性の問題として処理され、例えば、PVIII, k. 172abc; PVI, k. 132d-133a は存在表示語、PVI, k. 185 は、非存在表示語における否定の主要性を表明したものであり、PVI, k. 169 は、肯定ととりわけ外界の主要性の説示であるとされる。彼はこうして次のように言う。「否定が語の対象であるという定立に対する根拠として、論書中に述べられているところのものは、存在表示「語」の場合、否定が語から第一次的に現出するとうこととは矛盾するものであると推察される。非存在表示「語」の場合、『まさしくこれ「非存在」は、本来的な（欠如）(vivoḍa) である』[PVSV 92, 21]と云われる。存在表示「語」の場合には、（欠如）は副次要素であるから、第一次的なものではないということも Dh は「言明する」[JNA 208, 1-3]。肯定と否定それぞれの主要性が、存在論的な在り方に還元し得ることが示されているが、主要性の問題が、それぞれの理解のされ方に直接には関与しないということも明示されている。認識の場では、「兎角」といつた非存在表示語でも、それから、本来的に肯定的なものである表象が知識中に顕現するということが経験されるからである。以上により、Jの(2)及びRの定立により意味される（両者理解）の思想は、既に Dh にあり、肯定・否定の強調という問題は、歴史的に理解されるべきでなく、アポーハ論の理論体系自体に根拠をもつということが言える。（広島大学大学院）